

漢字指導（低学年）についての一考察

足利市立相生小学校教諭 大 槻 直 佑

優秀性をほりおこすということ（優秀性をほりおこすということが、才能に恵まれた生徒に限られてはならない）の意味には、ただなにを教えるべきかということだけにかぎらず、どのように教えたらよいか、またどのようにして生徒の興味を覚醒したらよいかということに関したいくつかが含まれているようである。（「教育の過程」）

「いまの子どもは漢字に弱い」とよく言われるがなるほどそのとおりだ。学力の調査の結果などからみてもうなずけることだ。この原因はいったい何だろう。子ども自身が漢字に対して努力しようとしなためだろうか。一部にはそれもあるだろうが、原因はそうではないような気がする。子どもが漢字に弱いのは、われわれの側にその原因があるのではなからうか。ブルーナーの言を借りれば、「どのように教えたらよいか、またどのようにして生徒の興味を覚醒したらよいか」という点に問題があるように思える。

わたくしは、「どのように教えたらよいか、またどのように児童の興味を覚醒したらよいか」ということの実践にはいる前に、「子どもは本来漢字に強い」ということを立証したいと思った。ここに右の点について立証するために行なった調査を主目的とした実践記録をのせ、今後の漢字指導に対して、一つの問題提起をしたいと思う。

まず、漢字に対するわたしの考え方をのべておきたい。

わたしは、漢字は日本人の思想・感情の共通媒材であると思っている。漢字は、日本文化の発展の障害になると言う人々も一部にはあるそうだが、そのような考え方こそ日本文化の発展を妨害するものであり、日本の文化を毒するものであると考える。漢字かなまじり文こそ日本だけの持つ高貴なる文字体系である。

明治百年と言われる現在までに、漢字がどのように取り扱われてきたかということ振り返って見るに、まず前島密の「漢字御廃止之儀」が頭に浮かぶ。この建白書が出されたのが1868年（慶応2年）であった。これに端を発し、今日まで何度となく漢字問題については論じ続けられている。

ところで、わたしはさきに漢字の重要であることをのべたが、だからと言って無制限に漢字を使用しようと言うのでもない。われわれが児童に指導する漢字は、当用漢字・当用漢字別表に従うものであることにはかわりはない。ただ一つ心配になることは、制限の度を越して、カナモジ論者の、または1869年（明治2年）南部義興による建白書「修国語論」のようなローマ字論者の言いなりにはなりたくないということである。

でも、その点は安心できるだろう。過去百年の間、やはり漢字は使用されつづけているからである。この事実はいったい何を意味しているのだろうか。答は簡単である。日本語を表現するさいにも、また日本語で表現されたものを理解するさいにも、漢字かなまじり文が好結果をもたらしているか

らに他ならない。いくらカナモジ論者やローマ字論者が集団をつくって漢字廃止を唱えようとも、やはり漢字は消えさるようなことはないのだ。漢字は老兵ではない。常にその時代に生きる日本国民の言語生活の中で、生々とその役割りを果たしているのである。このことは、漢字の重要さをますます痛感させるものでしかない。

古い話になるが、昭和36年4月のある新聞に社説として「科学技術教育と国語の重要性」という一文があったが、それをつぎに示してみよう。

——ちかごろほど、技術者養成とか、科学技術の必要がいわれることもあるまい。それが社会の要請であることは言うまでもない。

しかし、それにつけても、考えなければならぬのは、一見無関係のこのようであるが科学技術教育の底にあるものとして、「語学」とくに「国語」の教育を再検討してみることはなかるうか。

(中略)

極度に正確な表現と理解とを要求する科学を学ぼうとするならば、それにふさわしい語学力を身につけなければならないし、むしろ細かい知識や技術よりも、学問研究のための基礎としての国語をしっかりやってもらいたいと、教育者たちはその実感を告白している。

科学を修めるためには、人間の歴史の上に積み重ねられた先人の著述や記録をこの上なく正確に理解する「読解力」を必要とするだろう。またみずから観察し、経験し、実験したところを、どこまでも論理的に、精密に記録する「表現力」を欠いてはならない。したがって科学や技術ばかりでなく、すべての学問が進歩する根底には、それぞれの国の「国語」への練達というものがあることを見落してはならない。——と

また、これと同じようなことをブルーナーも言っている。すなわち、次のようにである。——
少なくとも科学や数学にいま費されているのに匹敵するだけの精力を人文科学や社会学の教育課程とその教授法の改善に費さなければならないということは明らかである。——まったくそのとおりだと思ふ。

ところで、自国語への練達と言えば、フランス人の自国語を愛する心を思い出す。日本人もフランス人のように、自国語を愛したいものである。まちがっても日本語を愛し、それにかわるものとして英語がいいなどというバカな話は耳にしたくないものである。この百年の間には、これに似た話もあったとか聞かすが、日本の発展を妨害する話である。変換理論で有名なチョムスキー氏さえも「漢字かなまじり文字体系は、最もすぐれた体系である。」(朝日ジャーナル)と言ひ、さらにつづけて「他の言語でも、そうしたものを使いべきかも知れない」とさえ言っているのである。思えば、われわれ日本民族のもつこの文学体系は高貴な文化であり、世界に誇るべきものである。夢にも漢字は不要だなど言うべきではない。

何かといえは、すぐ外国のものがよく見える日本人。明治百年のいまこそ、このすばらしい日本の文字体系を世界に誇ろうではないか。そのためには、まずわれわれ現場の教師がその嚆矢となるべく意識を持つべきである。

漢字を覚えるのに最も適した時期は五才から十才である(岡潔「月影」)

新潟県の亀田東小学校の1年生に550字漢字を提出して、その習得字数は学級平均469字であったということを書いた本を読んだことがあった。まったく驚いた。しかし、これだけのことをなし遂げたというのにそれほど無理もなかったとか。最初に、このことを読んだ時はいささか驚いたし、同時に無茶だという感じがしてならなかった。

だが、昨年水戸市で開かれた「全国漢字漢文研究会」に参加した時から、低学年からかなりの漢字をこなすことが可能であるというようにわたしの考え方も変わってきた。でもそれを実践に移すという段階にはすぐにははいれなかった。それというのも、他人から聞いた話では不安であったからだ。失敗したからといってやり直すことのできないわれわれ現場では、自分自身としてのデータを持ち合わせていかなければならない。

あれから1年。わたしは、低学年より多くの漢字を提出することが可能であり、単に多くの漢字を低学年から提出するというだけでなく、このことは、後の漢字習得に重要だからという考えが強まってきた。ただここで誤解をさけるために一言ことわっておきたいことは、低学年から多くの漢字を提出するということは、読みを主に考えての場合である。書くということまでは無理なことと思える。そこで、ここに『読み書き分離論』が生まれてくるわけである。わたしの考える漢字指導は読み書き分離論に基づくものである。このような考えに変わったのも、つぎにのべる『調査を主目的とした実践』の結果によるものである。

(なお、この実践にはいる前に、3年生について、生活環境を考えた漢字調査、および5年生については6年生の配当漢字についての追跡調査一人一人別のものを行なってみた。)

調査を主目的とした実践記録(2月23日)

1 対象学年 1年 (38名)

2 実施方法

ア 本文と未学習漢字を書いた単語カードを用意した。

イ 調査学級におもむき、まず単語カードを順に児童に示す。一つの単語カードは約5秒間示す。もし読める児童がいても挙手だけにとどめさせる。

ウ つぎに、本文にすこし肉付けしたものを二度くり返して話してやる。

エ その後、本文を配布して漢字総てにカナをつけさせる。

オ 最後にまとめとして、最初に示した単語カードの漢字を読ませる。(音読)

カ 所要時間は40分とする。時間配分は次のとおりである。

- 導入の話し合いをする。 3分
- 単語カードを示す。(最初) 5分
- お話をする。 2分
- カナをつけさせる。 20分
- 単語カードを読ませる。 10分

キ 一週間教室に単語カードを置き、児童の反応を観察したり、毎朝打ち合わせ時間(職員)中の10分間子どもたちどうして単語カードを用いて学習するようにしむける。

ク 一週間後に、本文（最初のものと同ープリント）を与えてカナづけをさせ、各自の所要時間も合わせて調査する。

3 本文

昔昔ある所に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある日、おじいさんは、裏の山で、赤い大きな柿の実を見付けました。

柿の実を食べようと思いました。

3つに割ろうとすると、中からかわいらしい女の子が出て来ました。

柿から生まれたので、柿子といの名前を付けました。

柿子は少しも大きくなりませんでした。

柿子は都に行って、勉強したいと思いました。

柿子は、おばあさんに、針と風船を買ってもらいました。

雨が降ってきたので、柿子はびしょぬれになってしまいました。

大きな鳥が飛んできて、風船を食べようと思いました。

柿子は、針で鳥をつつき、追い払ってしまいました。

柿子は、とうとう都に着くことができました。

（本文については、第2回全国漢字漢文研究会における石井勲氏の研究授業の際使用されたもの。
佐野・赤見小岩崎正夫先生の提供による。）

「実施方法」の順序に従って実施したわけであるが、ここに最初のカナふりの正答率を示したい。

昔	所	住	裏	柿	実	見	付	食	思	割
82%	50%	79%	8%	84%	63%	74%	79%	79%	21%	53%
出	来	名	前	少	都	行	勉	強	針	風
68%	71%	89%	89%	32%	58%	58%	47%	47%	68%	66%
船	買	降	鳥	飛	来	食	追	払	着	
66%	61%	79%	53%	50%	45%	68%	11%	8%	26%	

この結果からも言えるとおり「読み」ということではかなりの推奨力が低学年のうちからあるということだ。だから、低学年の漢字の提出数はかなりの分量でも習得可能であると言える。

調査中のようすから見ても、漢字が多いからといって特別抵抗もなかったようだ。まったく抵抗がなかったと言ってはうそになるが、ある程度の抵抗は当然であって、そもそも抵抗のないところに学習は成立しないと考える。これは、わたしだけの考えだろうか。

なお、データーを示すわけにはいかないがまとめの段階（実施方法「カ」の「単語カードを読ませる」段階）で、最初の単語カードを示して音読させたときの児童の態度は、驚くほど積極的であったということである。やっぱり子どもは漢字きらいではなかったという感じがした。

この後一週間、調査実施クラスに単語カードを放置しておき、子どもたちの単語カードに対する態

度の観察を学級担任にお願いしたところ

「毎日、休み時間などに友だちどうして自主的にカードを読み合い、とうとう真黒にしてみましたよ」

とのことであった。

さて、一週間たった時、実施方法「ク」に従って調査してみた。その結果はつぎのとおりである。
(所要時間は大半十分であった。おそい児童で十五分だった。)

昔	所	住	裏	柿	実	見	付	食	思	割
97%	92%	97%	87%	95%	89%	95%	95%	97%	61%	89%
出	来	名	前	少	都	行	勉	強	針	風
100%	100%	100%	100%	89%	95%	92%	87%	87%	100%	95%
船	買	降	鳥	飛	来	食	追	払	着	
95%	84%	100%	95%	100%	100%	97%	68%	66%	92%	

初回同様、この結果からもより強く子どもたちは漢字の「読み」ということに対しては抵抗を感じていないと言うことができる。

上のような調査結果はひとまずおいて、昭和42年10月20日に文部省より出された「小学校教育課程本発表全文」を読んでみると、その「第2、小学校の各教科等改善の具体方針の中の国語科「漢字学習7」につぎのようなことが示されている。

— 漢字の読み書き能力を高めるため、低学年から現行より多くの漢字が学習できるよう措置するとともに、他教科で学習する語句や漢字との関連、中学校における漢字学習との関連などについても配慮すること。

(1) 各学年で学習する漢字の字数の幅を広げるとともに、高学年では当用漢字別表以外の当用漢字についてもある程度学習できるようにする。

(2) 他教科独自の学習語句に使用される漢字についても、可能なかぎり、該当学年で学習できるように考慮する。

これをみると、漢字の重要性と低学年から数多く提出するという考え方に近づいていると同時に、読める漢字と書ける漢字を分離した考え方に立っていることがうかがえる。わたしも同感であり、この読み書き分離については、以前から多くの人々からさげばれていたことでもある。ただ、(2)については、石井勲氏の提案の中の「社会科用語は社会科で、理数科用語は理数科で提出し、指導すべきである。今まで当然のことのように考えられてきた“国語教科書に提出され指導されていない漢字は、他教科には提出すべきではない”という考え方は、ぜひ改めなければならない。」という考え方の方におおしたいものである。

支離滅裂をまとめてみると——。

子どもは本来漢字が好きである。だから、低学年のうちから当用漢字の範囲で多くの漢字を提出す

べきである。ただし、低学年のうちには「読む」という方に力を入れ、漢字の表意性を六書にのっとって指導すべきである。

このことは「書く」ということを主に考えた学習段階での抵抗が心理的にもかなり取り除かれ漢字力育成に大いに効果があるのではなからうかと思える。

感 想

子どもは本来漢字に強いということを実証している点なかなかおもしろい研究である。

この考え方に立って自信をもって指導しているのが、東京都目黒区立東山小学校の石井勲教諭である。一般に漢字は抵抗あるものと考えをきめてかかる傾向があるが、元来漢字は構造そのものが興味をひくようにできている。筆者は六書法にのっとって指導すべきであると述べているが、この考え方には賛成である。また、本論にはないが、漢字の指導にあたっては、使用頻度を考慮に入れた合理的な指導もあわせてとり入れたらどうか。

次に「読み書き分離論」について言及しているところがあるが、やゝ極端な考え方である。読み書きの完全な意味における分離論には問題がある。改訂教育課程の答申には配当漢字を現行のものより幅をもたせ、量をふやすと出ているので、分離というよりも幅をもたせるという考え方が無難であろう。とにかく筆者の積極的な研究態度には敬服している。